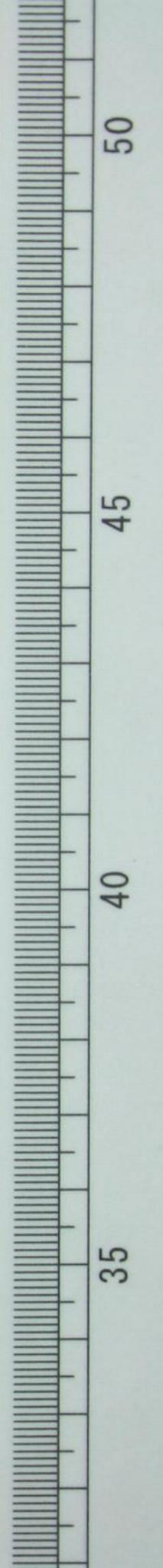


小精廬日誌

昭和十四年
十二月以降

特別
14
1919
636



小幡庵日記

昭和十四年十二月

十二月

三日

白

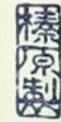
晴、龜山寺にこし湯にお参りお祖師の書回し
 を持参し、是匣古法山院を言ひし事あり日
 常山家の字あり振かふ五時光を拝あり春日坊土小
 群の法要に臨む、今坊大隈今郎君と葉子を持
 来、病のため光を留め早く辭し、病人の法要に

釋夫

山崎先生傳記... 内子と論議す、格別の...
... 腕師の...
... 内... 白米の...
... 此... 教...

四日

朝来下利數回苦痛多し、増田美之...
... 十一時迄を...
... 針...
... 日本... 吳佩



平子儒將考死

五日

朝来押定顔面ニ枚指三市...
... 出版部...
... 山...
... 梅...
... 市... 針...
... 市... 井... 押...

送、新、向、高、原、法、寺、講、立、并、頼、志、海、の、志、を、示、す、に、
朝、鮮、蟹、田、五、法、と、林、福、大、江、と、名、の、と、梨、果、刊、来、

六日

重、天、作、誓、を、し、物、未、能、作、事、す、以、乃、の、酒、井、あ、る、を、以、て、
別、く、早、急、の、於、木、く、山、陽、と、物、の、鑑、を、以、て、未、く、病、得、注、
射、の、為、の、睡、成、つ、と、冬、休、平、穩、也、大、江、之、美、の、見、奔、と、其、の、
左、北、本、法、門、く、田、鳴、瀬、法、院、も、白、果、之、佳、格、と、十七、日、
拂、海、の、又、別、日、冷、睡、と、平、山、懸、留、は、身、珍、高、壯、願、の、
下、と、三、年、の、未、雨、



七日

微、而、病、の、運、子、静、養、中、の、字、居、世、法、以、法、余、の、投、和、
と、ぬ、め、と、書、物、心、を、持、利、午、後、余、針、毫、と、言、く、
内、子、の、夜、又、睡、成、中、神、任、鏡、動、始、終、夢、と、入、世、の、
心、の、さ、ま、い、の、為、め、と、夜、方、と、感、す、と、一、何、の、心、の、
糖、の、注、射、と、行、ふ、と、六、日、目、也、新、病、と、書、し、於、此、紙、
の、後、意、を、入、く、早、大、出、所、部、法、令、而、の、身、く、廿、二、日、也、

八日

昨、朝、目、難、得、を、書、す、夫、病、得、寒、休、迄、と、し、八、日、年、内、子、咳、

嗽、怒る乎、（？）困入、歩の困難、尋病困心、喉部、（？）
了ことと、初め、（？）判明、（？）山の於断、流を、（？）と、（？）の
大改の、（？）林復、（？）中、（？）と、（？）且つ、（？）春、（？）長、（？）持、（？）一、（？）持、（？）利、（？）す、（？）ま、（？）の
夫、（？）と、（？）と、（？）物、（？）と、（？）守、（？）も、（？）ま、（？）と、（？）大、（？）改、（？）の、（？）か、（？）く、（？）年、（？）々、（？）品、（？）と、（？）器、（？）の
今、（？）花、（？）宗、（？）家、（？）の、（？）志、（？）を、（？）今、（？）と、（？）報、（？）り、（？）ん、（？）早、（？）持、（？）の、（？）丸、（？）を、（？）鑑、（？）志、（？）の、（？）
員、（？）と、（？）共、（？）々、（？）ス、（？）ツ、（？）カ、（？）シ、（？）判、（？）明、（？）の、（？）勢、（？）と、（？）さ、（？）ら、（？）く、（？）全、（？）上、（？）の、（？）士、（？）人、（？）の、（？）出、（？）立、（？）
す、（？）ん、（？）ん、（？）か、（？）お、（？）め、（？）て、（？）う、（？）て、（？）酒、（？）井、（？）の、（？）林、（？）を、（？）守、（？）り、（？）此、（？）と、（？）先、（？）同、（？）
借

九日

昨日の終末、（？）二、（？）年、（？）日、（？）未、（？）の、（？）大、（？）改、（？）の、（？）然、（？）る、（？）市、（？）の、（？）銀、（？）を、（？）取、（？）り、（？）



リ、（？）来、（？）之、（？）午、（？）後、（？）神、（？）の、（？）の、（？）針、（？）差、（？）と、（？）さ、（？）く、（？）梅、（？）海、（？）松、（？）の、（？）似、（？）、（？）風、（？）空、（？）
色、（？）前、（？）と、（？）清、（？）く、（？）川、（？）の、（？）金、（？）破、（？）横、（？）と、（？）も、（？）修、（？）保、（？）成、（？）く、（？）十、（？）四、（？）の、（？）拂、（？）海、（？）用、（？）の、（？）日、（？）
香、（？）花、（？）と、（？）懸、（？）り、（？）節、（？）判、（？）未、（？）晚、（？）河、（？）海、（？）の、（？）耳、（？）珍、（？）、（？）舌、（？）頭、（？）に、（？）兵、（？）衛、（？）の、（？）
リ、（？）子、（？）の、（？）入、（？）学、（？）す、（？）と、（？）東、（？）之、（？）坂、（？）本、（？）守、（？）と、（？）さ、（？）ら、（？）ま、（？）す、（？）

十日

日

昨日、（？）衛、（？）公、（？）の、（？）陽、（？）の、（？）文、（？）彦、（？）湖、（？）始、（？）葉、（？）の、（？）前、（？）、（？）北、（？）條、（？）の、（？）敷、（？）の、（？）形、（？）
年、（？）新、（？）の、（？）色、（？）紙、（？）押、（？）毫、（？）新、（？）送、（？）出、（？）征、（？）の、（？）人、（？）と、（？）共、（？）ら、（？）く、（？）懸、（？）り、（？）代、（？）衣、（？）
所、（？）今、（？）と、（？）割、（？）ち、（？）の、（？）三、（？）個、（？）を、（？）油、（？）の、（？）市、（？）島、（？）城、（？）と、（？）も、（？）海、（？）志、（？）利、（？）の、（？）五、（？）時、（？）
と、（？）珍、（？）く、（？）看、（？）病、（？）の、（？）来、（？）り、（？）丹、（？）子、（？）を、（？）柘、（？）一、（？）つ、（？）葉、（？）の、（？）肥、（？）遠、（？）道、（？）正、（？）和、（？）

行政権難をの内情を挨拶す、重梅の葬儀、端緒を
油と唯たる家の志母、此の不幸、刺涙と云々、肥後史記
（重梅と云々、八十字の志、歎く、此の志、此の志、此の志、
り、是と、此の志、此の志、此の志、此の志、此の志、此の志、

十三日

町東、此の志、此の志、此の志、此の志、此の志、此の志、
此の志、此の志、此の志、此の志、此の志、此の志、
此の志、此の志、此の志、此の志、此の志、此の志、
此の志、此の志、此の志、此の志、此の志、此の志、
此の志、此の志、此の志、此の志、此の志、此の志、



言頭、此の志、此の志、此の志、此の志、此の志、此の志、
施し、此の志、此の志、此の志、此の志、此の志、此の志、

十四日

町、此の志、此の志、此の志、此の志、此の志、此の志、
此の志、此の志、此の志、此の志、此の志、此の志、
此の志、此の志、此の志、此の志、此の志、此の志、
此の志、此の志、此の志、此の志、此の志、此の志、
此の志、此の志、此の志、此の志、此の志、此の志、

石村外未大いりきりさうすもるわと筆一時
七書一稿成る暇あり暇に思ふ事今をさす
死後後を以てしむ

十五日

晴朝未定堂室の院説に投するきり福を著作して未成
命相字銀河礼の方日極あるもの十九日預金期
限満つる朝未一未のち日前は長と新年旅の思出
と題して稿を平福の大各りとの新年節に寄る午後
待と清く且つ抄す日未言と登人の唐島場花より



未定、夜より海を舟

十一

微雨、古め死云々、角子喜三はかま回直流にむ状を
志す、東京の、此より此へ、余の随筆を徴し、
互らぬ執事、に丸めたる、今日、女女の初七日、
午後、午後、午後、午後、午後、午後、午後、午後、
又且つ鈔す、才一、此の、又、預金、就て未定

十七日

日

明、書室の掃きよきしと起る地巻、十枚在案
日新堂の新書、新書、新書、新書、新書、新書、
の書、新書、新書、新書、新書、新書、新書、
井去し、明と付ひ、未の、北子、異術、多、新書、
心、を、以つて、業、と、言ひ、新書、新書、新書、
き、新書、と、言ひ、未の、北子、異術、多、新書、
種、新書、一、と、言ひ、未の、北子、異術、多、新書、

十八日

扶明、重、極、宗、師、長、雨、決、ま、る、新、河、村、山、心、巻、と、法、河

美、中、と、言ひ、未の、北子、異術、多、新書、
を、掃、き、し、余、か、ま、り、を、し、新書、新書、
を、と、校、し、業、代、新書、と、言ひ、未の、北子、
に、贈、り、明、と、言ひ、未の、北子、異術、多、
し、と、時、子、新書、と、言ひ、未の、北子、異術、
株、主、法、合、と、言ひ、未の、北子、異術、

十九日

明、印、刷、金、社、と、言ひ、未の、北子、異術、
四、十、九、日、向、り、合、る、四、十、八、日、十三、日、也、

田舎を久期保つべき事、本年預ける、田村社二ヶ村
預、其方の富を益増せしめ、餘米を貯り、予の地を
も動かす、政界性未だ、野利の人、為色紙十枚
押立、林喜一、富を治せしめ、海を東洋、丹波の
り、野の塩引、利未、日本同の故郷を、
萬の金取、成りの件、七年の解決、之の如何、の意、現
場、今此の事、在、柳、梅、士、の、人、其、義、を、
か、五、万、圓、積、け、せ、し、此、の、事、を、解、決、せ、し、め、な、ら、ば、
か、此、の、事、の、利、を、と、ら、せ、し、め、な、ら、ば、
か、此、の、事、の、利、を、と、ら、せ、し、め、な、ら、ば、

二十日

町早報市振方、先、報、自、身、人、の、三、時、に、去、り、の、事、
儀、は、也、の、事、は、丹、美、座、平、の、事、は、也、の、事、
日、年、身、の、事、は、也、の、事、は、也、の、事、
富、石、新、海、軍、業、社、私、記、二、卷、一、小、川、時、に、助、産、
と、事、は、也、の、事、は、也、の、事、は、也、の、事、
手、持、た、平、山、海、軍、業、社、の、事、は、也、の、事、
米、の、世、に、を、依、頼、す、る、事、は、也、の、事、
一、米、の、野、村、保、次、の、事、は、也、の、事、

二十一日

市、後田書記の余の隨筆系札を校しと東郷を部
送す、重柄祖母の葬儀に十日の香典をおねを昂と老
ふ、喜舎山より台邊にお豚肉デングを贈る
日、志は各々口取料地を定めておれり、高長法去り
餅利来、行何常林くも、日給、予の寄札をおね
口早稲田方言、おれり、接利、香江を讀み且つおれり
休島代知り心給し、林橋二果おれり、林くも利
送、赤炭欠乏する、冬家庭田印金、家
幸に、おれり、贈り、おれり、高補花を、おれり

二十二日

時、新書、おれり、解利、高長法去、大餅、代、おれり
送、酒井千尋、おれり、垣川を、おれり、来、おれり、油、おれり
才、有田家の火鉢を、おれり、神田を、おれり、おれり、おれり
を、おれり、七田、おれり、金、おれり、早、おれり、部、おれり、金、おれり
おれり、おれり、おれり、おれり、おれり、おれり、おれり、おれり
日、米、おれり、おれり、おれり、おれり、おれり、おれり、おれり、おれり

二十三日

おれり、おれり、おれり、おれり、おれり、おれり、おれり、おれり

集雜法清閑、又答七人、山内容重の刻印と書簡
と載て一文と首す、漢橋、余の陸羽品中長千尺、
注の在りなき金子と答ふ振、今由字原跡を未だ楠
瀬向、投簡漢橋、陸羽につき、尚状未、山内等
宛致く、答す、花昔四個、陸羽へ、楠瀬の身
よも、京都府予、板倉の和印二顆を贈る
名家遺印、加式、市時成、一箇、醫
と書代三、田由ふ、交直信友、出所、尚生所
全集、二十、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

二十四日

時、余の、
心も載と、
函也、
余の、
目、
葉、
を、

付山の客型の書簡と印箋と貸付、重松家より
一、二十七日の書簡、物と器の来り



板倉勝の
子孫氏 吳集利

梅渡日年所贈

測大の書を来り、近題を、三川信長より
朱刻、有詩漫抄、且つ漫録書牘半ば成る

二十五日

吹浪、懐より度りたる小品を、数に記す、静の元

静の元

ふつきの台湾を相と見え、浦水と、わが未老人
の、氏の上より、新を割る、塩澤昌久と、赤戸
納豆と、空のせり、も、廣詩を、清く、且つ、おし
一書牘成る、園テ、まう、松の枝と、つり、防二宮、
雲、官道、陳の家と、巡、罪、七、炭と、捨す、我、家、食
皇、時、炭を、隠す、日、の、努力、亦、戦、時、中、の、一、号
瓶也、お、田、文、庫、一、く、を、待、望、門、院、陪、墓、考、を、言、
ひ、あ、り、松、井、合、社、と、高、法、改、心、一、就、て、未、志、夜、久、入、り
海、を、来、り、お、人、二、軒、と、木、炭、と、贈、り、来、り、炭、鐵、餓、饉
の、折、柄、勿、論、深、文、雪、あ、り、

兩山日海東國名山縣終... 未去、其人亦多たるの
同定也六十... 應... あり... 平...
弟の... 念... あり... 字...
耳、和未と入る... 轉... 報... 漢...
... 余の... 出... の...
... 預... を... 左の... 月... 受
又

パンドール、砂時... 小休... 二... 泰...
小品... 市... 入... 一... 邦... 河... 呂... 操

東京製

秀合、小品... 羽... 洋... 一...
全五十... 之... 交... 有... 之... 道... 泉... 湯... 境...
... 某... 氏... 山... 湯... の... 大... 悔... の... 鑑... 定... と... 一... 境...
... 山... 和... 田... 区... 間... を... 投... 去... 坂... 口... 献... 去... と... 塩... 川...
... 山... 午... 三... 城... 老... 店... と... 以... て... 七... 路... 洋... 兵... と... 合... せ...
... 立... 川... 作... あり... 白... 米... 代... 十三... 回... 四... 十... 長... 為... 留... 置...
... 新... 待... 望... の... 境... 一... 後... 鏡... 翻... 幸... 女... 神... 所... 清... 泉... と... 後... 山...
... 龍... 心... 寺... 境... の... 正... 成... の... 昔... 伝... と... 有... 所... 清... 泉... の... あり... ち... 川... 瀬... 一...
... 馬... 房... 伝... と... 有... 東... 京... の... 大... 坂... 毎... 日... 社... 一... 先... 頃... 受... 立... 同...
... の... 程... 一... 毫... と... 送... り... 一... 割... 出... 利... 一... 塩... 津... 坂... 口... 一... 塩... 泉... と... 後...

金二萬四圓半の返り仰せをす大賀一郎を以て
根とすをせむる。

二十七日

時米山灰の配給宜しきを得ず、高戸困り及
初めを戦争甚きを免ふ、各政黨政府、極力
其意を承渡合ふ不信任案を出さんとす外侮を
招えんことを恐る、金百八十七圓返仰、医業
代拂一海軍往診料一百六圓、近衛英房十名
平山匡深謝儀三十圓、海軍謝儀二十圓也、河野輝

亮大詩を抄録二帖成る、一帖を古詩漫海、一帖を臥
吟詩鈔と號す、八十の干羽也と自嘲す、吉田が
男くし来也、石田祖岳の歌集と稱の洋漢を讀む、
田文三庫子山房大賀一郎くは、かきをせむ、坂口
毛一經節を贈り、本日各派有志謝儀首相を請ふを
不信任自決を促す決議文を呈交す

二十八日

時野村保次郎と下女、就て来間、任友
録り、金五百圓引出し、年去家用、

元ノ香陽を并ニ牛込防復園ニテ朱蘭色
紙者美押書電、被架本末、先才二配本、早大
新多、くも、海河を贈り来、食後日本橋丸、美
と、此のて、回を兼、二三の、を、と、贈り、八、入、の、高、田、回、出
被、去、松、本、妻、一、く、と、被、と、被、是、を、寄、在、右、永、三、十、年、
方、親、曾、後、刀、劍、鑑、定、出、の、被、本、末、を、寄、と、年、の、刀
劍、鑑、定、書、の、最、上、の、よ、り、と、寄、解、読、新、文、二、冊、附
随、法、定、且、冷、田、子、の、病、八、分、通、り、治、愈、あり、美、い、と、寄、
急、の、の、と、寄、本、年、の、公、限、り、於、察、お、切、り、と、寄、
大、井、の、書、子、美、と、寄、三、次、の、白、楽、元、と、日、本、文

河内

送、日本、国、書、院、協、会、と、一、月、十、日、の、時、時、法、會、を、開、く、方
の、に、寄、り、議、題、徳、川、宗、宗、特、別、給、金、寄、分、の、件、也
市、島、成、一、と、い、ふ、事、也、夜、入、り、冊、の、長、伯、者、と、
寄、来、也、栗、林、の、女、と、又、也、と、

二十九日

以、其、洲、書、院、本、も、意、給、記、一、卷、市、島、成、一、寄、り、被、記
二、年、一、家、の、記、也、松、本、妻、一、と、寄、る、を、寄、り、寄、り、
物、と、贈、り、来、り、揮、毫、紙、成、り、又、好、勝、と、寄、り、
物、と、贈、り、来、り、揮、毫、紙、成、り、又、好、勝、と、寄、り、

生利の機 買取の事 且の一事 入の
致しと仰り、其家々、果村、来昨、時多、好、
上、漢、正、土、甲、其、大、家、死、者、十、萬、と、傳、り、掃、
積、倉、賑、の、向、入、兵、集、集、の、山、海、を、争、つ、て、事、の、
よ、と、未、也、山、山、に、争、つ、て、道、を、上、基、之、と、利、其、
活、次、り、よ、白、米、一、億、五、千、萬、石、の、過、り、也、也、

三十日

時、買、取、の、政、持、強、く、す、現、由、國、生、産、の、初、め、も、支、給、を、
借、き、回、民、を、し、弱、体、内、測、の、呼、び、よ、り、外、交、の、政、
我、國、の、幸、一、と、較、り、好、油、を、も、内、地、の、國、策、
と、す、米、の、買、取、の、如、き、莫、く、生、産、の、必、要、品、の、配、
す、回、民、の、常、と、為、り、す、其、の、如、き、配、分、の、
國、民、の、不、平、也、と、思、ふ、也、
ハ、思、ふ、如、き、弱、体、内、測、の、呼、び、よ、り、所、と、
生、活、物、資、の、配、分、の、如、き、我、國、未、だ、
内、各、弱、体、の、故、を、も、一、回、の、不、平、
ハ、外、國、を、し、我、國、を、糶、す、窮、乏、を、
痛、く、も、服、を、せ、し、め、り、政、治、の、
帰、す、も、其、の、言、ふ、事、也、也、此、時、の、
ハ、既、に、已、集、を、し、其、事、を、
議、す、大、體、其、事、を、決、す、

漢書

と、新、と、米、の、買、取、の、如、き、莫、く、生、産、の、必、要、品、の、配、分、の、
す、回、民、の、常、と、為、り、す、其、の、如、き、配、分、の、
國、民、の、不、平、也、と、思、ふ、也、
ハ、思、ふ、如、き、弱、体、内、測、の、呼、び、よ、り、所、と、
生、活、物、資、の、配、分、の、如、き、我、國、未、だ、
内、各、弱、体、の、故、を、も、一、回、の、不、平、
ハ、外、國、を、し、我、國、を、糶、す、窮、乏、を、
痛、く、も、服、を、せ、し、め、り、政、治、の、
帰、す、も、其、の、言、ふ、事、也、也、此、時、の、
ハ、既、に、已、集、を、し、其、事、を、
議、す、大、體、其、事、を、決、す、

と云ふは先づ衆議院の各黨の政府に懐疑を起す可敷
る達より議堂の有志を結束しん政府の不信に暗に
首を二川思を過し、本令の臨んが全て議議不信に
を決するやん、爲政府議堂を解散するや未だ
知る可敷いとも、懸念不成主たりたるの責り議
院を存ん、不信に決然と時望に由りたるを得た、政
府を擁護するも果しと後と善悪する政府成りたる得
るや否や、政堂にお録が回つたり成り、無事なり、或ハ
解散ハ、其の何なりとも、着手中の外交を阻害し、
最も大切の時勢を國內の紛争に日を費す、此れも
議院の責任なり、

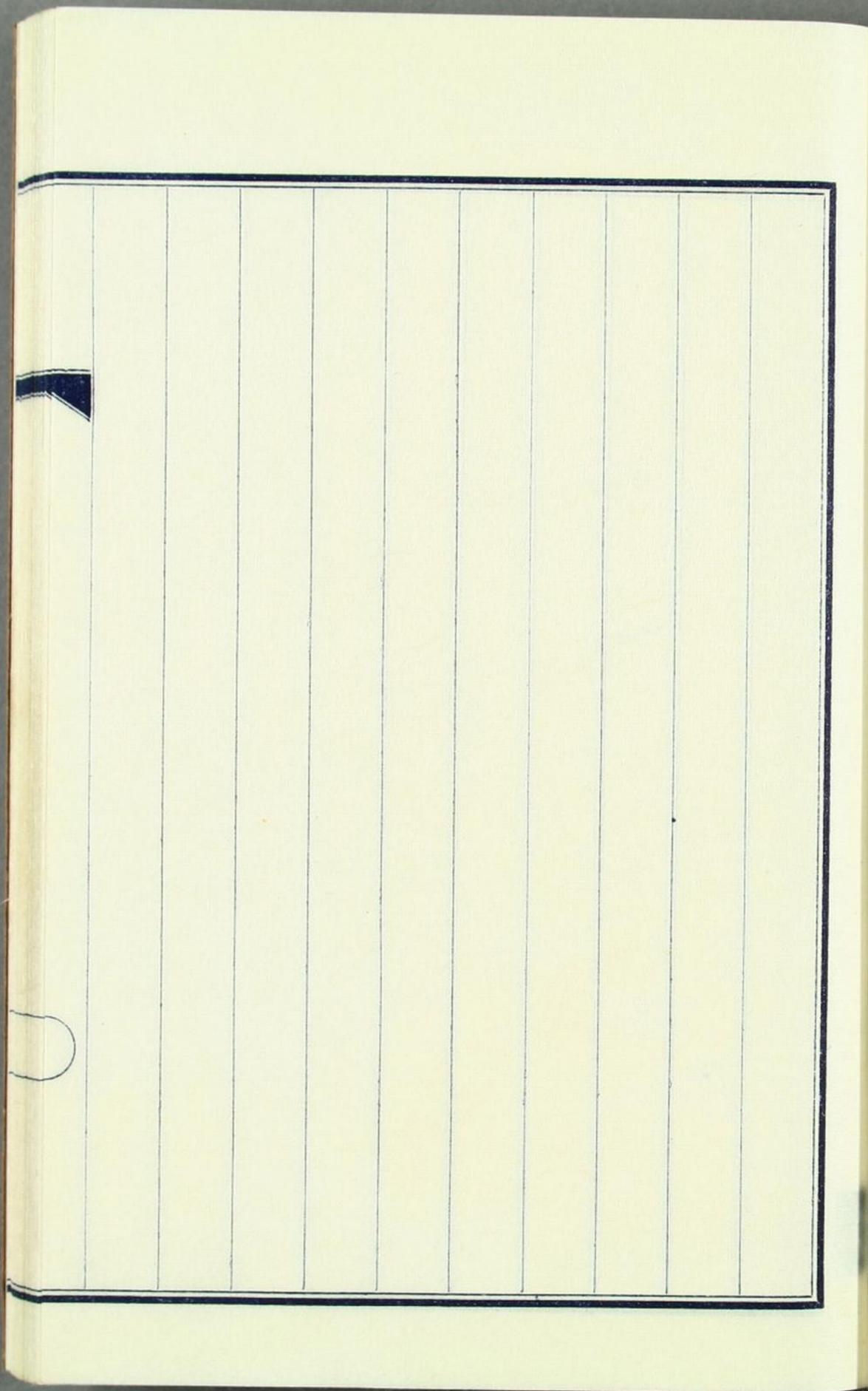
議院

しての懸念を著し、或は得米、或は
亦、此場合の政府と議院と報捷する可敷、後等
と一川退下とあり、議堂を解散せしむるも、或は
也

賀田進治朝野を起る可敷、丹生、原、藤、
向、米、天、と、日、右、文、と、し、と、清、い、本、令、の、行、こ、と、終、を、此
日、迄、の、終、尾、に、録、す、毎、年、の、例、の、如、く、二、三、家、の、名、を、
録、す、其、の、後、反、武、弁、彰、一、死、去、早、命、法、政、の、變
宜、在、議、堂、と、し、書、せ、ら、る、

三ノ年... 終末の地と...

三ノ年...



照
錄
簿

以下
5 丁
白紙

昭和十四年日活の終尾にむす

本年の暮と閉つ本年の紀元二千九百九十九年とて
年号の 終
 幕とたゞ二千六百年の暮にいくと、余の八十齡も亦好に
 終るべきとて、本年の極余を取つて不幸の災をうけ
 二月中脈をこし神は痛起り平臥約一月に及ぶ漸やく
 癒へて四月下旬腦溢血の爲の輕急うき、右半身不随
 となり又と病臥二三月報々軒床を得たりも手足のこは
 かり除かず、閉居ハ一月病牀を掃ふも門外に出ず、浴盆を
 浴すも僅くは白動直と藉りあるこが外に出ぬるのみ
 あり亦老病とて老暮を離れ能はず、十四年の斯くは

以下

本年世界の厄年なり。日支の交戦未だ局を収むるに
日西の間の紛争と騒々を提擧す。英は其の爲め其の外交
先して、獨り波蘭に兵端をいささか波蘭を略す。ソレ亦獨
に共力して其の波地を界す。様々英佛獨入開戦を
宣し、亦ニ世界戦争の端を甚す。吾々の間の此の世界戦
争は、本以入の政略を取り、英佛支が力よく手をいさ、汪
兆銘起つて和平を策し、日本の立場漸やく有利となり
たり。又、新大陸の運動微細なり。世界の政令も暗濛なり。ソレ職
いとして、逸夫の利を占め、遂にロンドンに開戦し、獨り英佛と海

東京製

戦を考ふる。陸戦の停頓状態あり

本年世界の厄年なり。日支の交戦未だ局を収むるに
日西の間の紛争と騒々を提擧す。英は其の爲め其の外交
先して、獨り波蘭に兵端をいささか波蘭を略す。ソレ亦獨
に共力して其の波地を界す。様々英佛獨入開戦を
宣し、亦ニ世界戦争の端を甚す。吾々の間の此の世界戦
争は、本以入の政略を取り、英佛支が力よく手をいさ、汪
兆銘起つて和平を策し、日本の立場漸やく有利となり
たり。又、新大陸の運動微細なり。世界の政令も暗濛なり。ソレ職
いとして、逸夫の利を占め、遂にロンドンに開戦し、獨り英佛と海

辰暮旦の祝殿を所別せしむ。有り候か問後が四割向上合の
分長分りか、病後却任して長谷川城也。後、
病後後絶對に酒と淫と殊く生活の無意味と云ふ十一
月中二三四回電車と降りお坐せし。所いなり。具と感て予
は余今日出居し。有り候。高田のふ群のふと家家の志を合ふ力
あり。路あり。又、御門より。其、無聊を感て。為の後日
讀まんとして。後。さう。四五の。其、籍を讀讀し。けり。然。然。然。
て世界の時。予。も力り。世。計。家。一。たり。五。年。於。暇。十。冊
と。筆。の。外。例。ら。る。し。が。病。問。報。素。に。懶。く。僅。く。三。冊。と。如
く。た。り。の。心。致。給。士。偶。然。と。起。る。事。の。こ。ん。也。

其の病愈え就て。一日。志。者。略。し。父。が。六。年。前。輕。微。の。中。症
は。推。し。其。後。と。と。挫。き。治。療。は。し。の。心。を。費。し。肝。炎。と。病
み。な。り。予。の。大。分。こ。れ。を。予。念。へ。る。も。恐。後。疾。愈。甚。し。く。脚。部
の。運。動。を。想。ひ。進。む。胸。部。煩。悶。し。呼。吸。道。通。り。横。臥。と。得。せ
る。こ。と。も。有。り。且。つ。於。て。疾。愈。す。し。衣。敷。氣。血。運。行。知。と。云。ふ
或。の。氣。管。を。入。り。の。こ。と。と。云。ひ。其。の。心。を。予。と。予。南。と。云。ふ。事。も。一。向
に。致。さ。ず。平。山。知。く。医。校。の。診。察。も。心。部。部。の。故。障
あり。呼。吸。の。道。は。肺。部。の。故。障。も。咳。嗽。も。皆。こ。ん。り。生。ず
と。他。は。心。部。の。故。障。と。云。ふ。事。も。予。の。心。部。部。の。故。障。と。云。ふ
等。の。事。當。り。漸。々。と。持。た。り。向。ひ。つ。て。予。平。山。の。疾。愈。後。の。心

幸ひ早く若海と死んでしまふは後には容易に難き
事とんと一家和を執骨と聞きたり。

戦後の龍蝦四年故に糧を乏しく感へるの年より
思儀と云ふべきは、實に家庭に於て不自由を感へる
この世に無いと云ふは、此世に於ては、砂粒に無いと云ふより、
ケも無いと云ふは、此世に於ては、十軒高の煙を待つ
の事より、若くは、此世に於ては、此世に於ては、
入る事より、此世に於ては、唯だ此世に於ては、
下世の不達の如き事を家庭と因らば、家と縁とを、十日満入
たり、此世に於ては、此世に於ては、此世に於ては、

去年如く死す四ヶ月前、田中節子三上春次中村近
午若取夏目河内仙四郎野矢之夫乃此に二三あり、
此上の余、長し、田中節子、佐藤澄彦、久白信
事、歌の上、(仁兵衛長男) 此子、息入、事、件、三、
未、柄、

休、息、男、女、三、好、多、原、亦、た、ら、し、の、死、を、感、
得、も、愛、れ、た、中、に、其、事、の、一、切、を、
稿、曰、大、子、死、す、と、院、長、と、云、
介、子、家、庭、の、事、を、表、し、
概、象、を、描、き、



暇澄血に罹りて死す。遺子三人あり、即夜遺體
を長男養之宅に移し、葬式萬縁満りて歸す。この由
る由中の支出は、先づ、燈と自家の志願再死を
買収せんが爲め一帖をかり、

本年の死後、日を送ること多し、無聊を厭する者
の時、指し書すより二冊二巻あり、魏香齋代研
録二冊、古詩漫漶、臥吟詩鈔二帖とす、右手
中忘るる娘流細字と号す、流の初、皆す許の拙字
也、此年一切物を購ひ、人の贈んず、即又増山守高
刻の指し書、前記印一紙、吳景刻の板倉、舟中

東京製

差の初印二紙外、無刻、堀朱印二紙あり、此種の人
の印、新撰法華經社記二巻、後巻
本、山内中花回巻、東寺初院、長久三年、宇
刀劍銘巻、善因圓回、古改巻、後巻、新撰雙門院境
巻、致つて同文巻、出紙、専らあり、

漢詩、上出紙、了家、花の五十の展覧、と有り
小品の紛乱、一ヤ、とあり、四五のよ、とあり、
お金、奉仕入、若二個外、若千、市合、漢詩、預
け置、く、とあり、馬、中、教、云、記、困難、の、故、也
歲、政、時、分、多、乘、西、邊、谷、堂、漢、詩、有、志、己、年、身、

の流石を代表して首ね、不信任を唱へて引退を迫り、
どう成行か逆婚し難きも此頃の引退も後合解散も
外に動して去るに苦し、軍事一發果もあつてんどうか
漸やく定ぬをえりつらう、吾米國各府宿海業利法
等と女のえんどうか、政府を裁断するのすし、路を以
てて一ちも病合解散も此頃の甚れ感心せよ、也
こと一病問、ぬり、海つて及ね、湖をたやう、大ん拾
をぬんぬ、及ぬのえり、多いの、手紙で、えん、おくり、原
稿ひ、ち、数、十、箇、の、多、き、よ、が、あ、つ、て、定、め、た、る、困、の
状の神座の時林大材とよものち惜しく、紙屑のえ

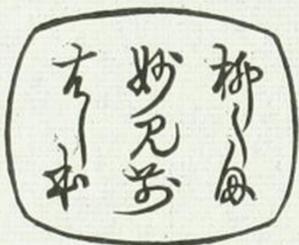
東京

拂ふ、い、ま、何、の、の、利、用、な、い、の、困、の、と、思、ふ、と、も、な、い、と
来す、も、あ、い、ま、の、と、な、り、と、比、し、合、身、大、お、二、個、の、お
ぬ、の、相、違、い、に、移、り、た、大、略、手、紙、の、保、存、を、お、の、ま、し、の、に
自、分、の、回、想、十、年、以、前、の、よ、う、で、電、話、の、無、う、た、次、第、の
え、い、ま、の、お、の、え、ん、た、書、の、書、き、一、々、拾、へ、り、あ、つ、て、い
ち、の、か、相、違、い、な、い、お、の、お、の、一、部、あ、る、と、先、年、四、五、の、手、紙
を、ア、ン、ン、に、お、の、お、の、お、の、お、の、お、の、お、の、お、の、お、の、
三、紙、の、お、の、お、の、お、の、お、の、お、の、お、の、お、の、お、の、
お、の、お、の、お、の、お、の、お、の、お、の、お、の、お、の、お、の、
十、数、の、お、の、お、の、お、の、お、の、お、の、お、の、お、の、お、の、

續々商標集 其二十九

江戸柳嶋 料理店橋本

龜戸初卯詣りや梅見としやれる粹客は、業平親を名物としたこの店の名を知らぬものはなかつた、この店の創始年代は明かでないが、廣重の江戸高名會亭盡には出てゐるから、天保の末か弘化嘉永には開業してゐたであらう。明治になつてからは五代目の尾上菊五郎がこの家に好んで遊んだことは有名である、その菊五郎が明治十七年頃、田村成義、清元菊壽太夫、同梅吉等と、こゝで天狗俳諧をやつたが、その席上で作つたものと傳ふる端唄に「橋本へ、つけるや雪の、浮れ船、簾かゝげて二階から、のぞむ田面に村雀」といふ本調子物があるが、今は田の面どころか煤煙天に漲り、屋根船の通つた十間川も溝泥のやうにくるずみ、その上に大正震災をきツかけにこの家も廢業したので、お向ふの妙見の境内に初代豊國の煙筆塚を始め、數多の石碑が火熱で破壊したまゝ、そこゝに轉がつてゐるのが見られるのみである。

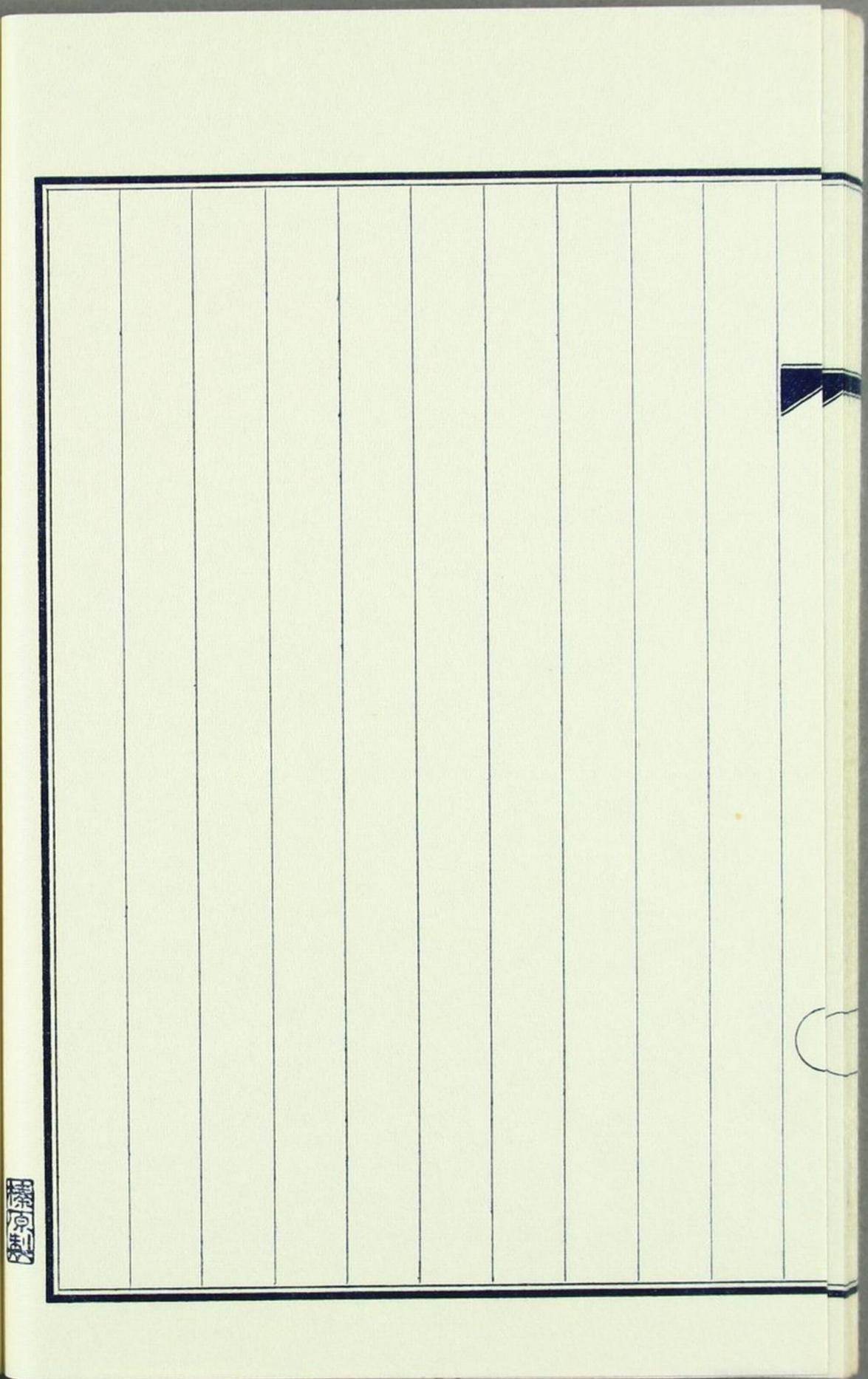
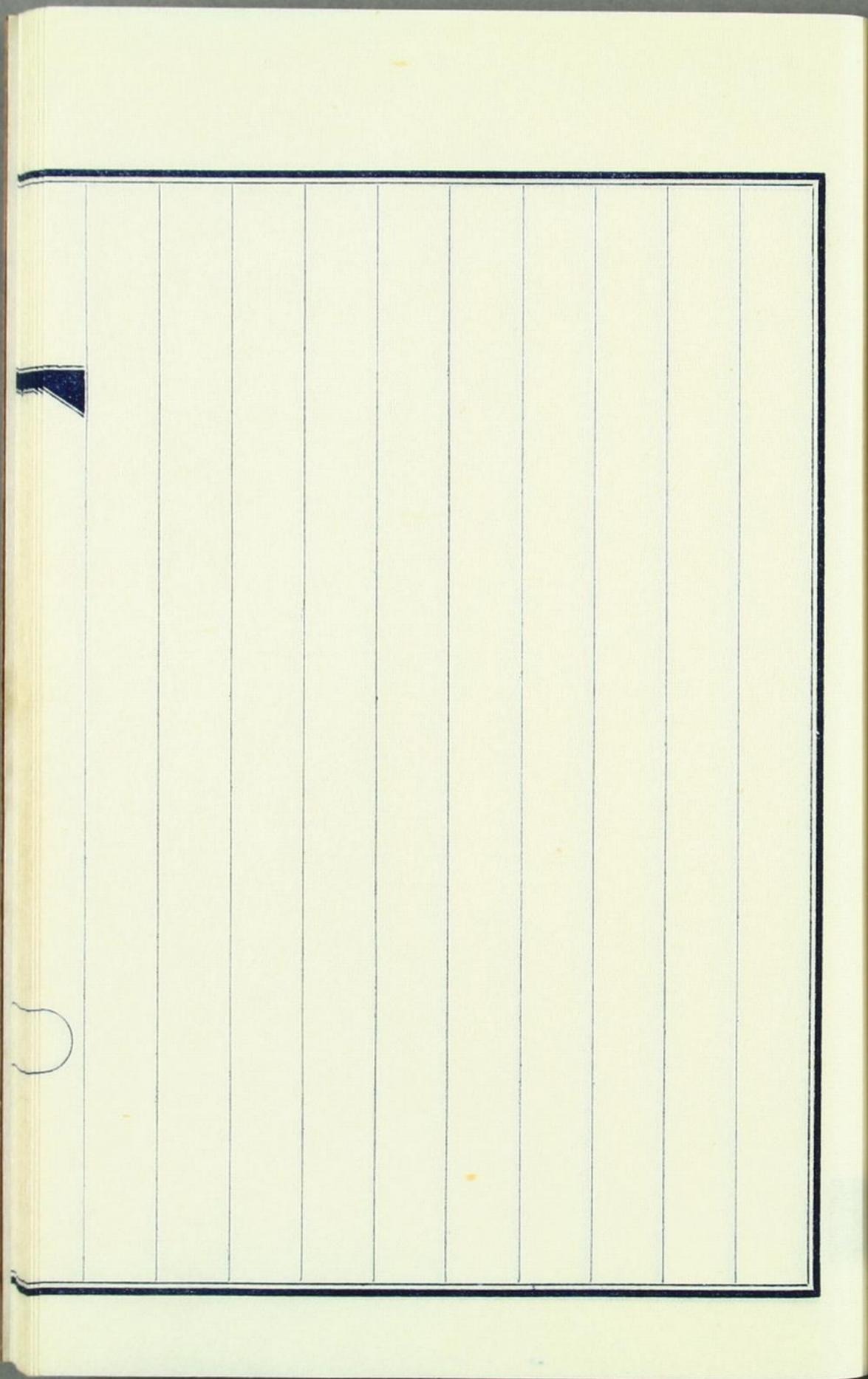


りといふ家もなすことなり。至極に造筆を印刷
所にて痛福ひせんが思ふに可なり。筆もつる
るよもあふが、其台筆の筆と云ふは、
仮と書す。平紙の筆も、
吾と書す。かういふ文に流居るといふことなり。

本年法お修膳費、家費、
り内不も、
一、
父、
二千五百圓と現す。

東京製

各、
名、
金、
八、
千、
圓、
と、
現、
す。



東京

以下全て

白紙

